

信行要文 ⑤

第十一回 法華講夏期講習会 第五期

（平成二十六年七月二十日）

皆さん、おはようございます。

本日は、平成二十六年度の法華講夏期講習会第五期に当たり、このテキストにありますとおり、「信行要文」につきまして少々お話を申し上げたいと思います。

本日は、テキスト九ページの第十五番『秋元御書』から始めます。

15 秋元御書

種・熟・脱の法門、法華經の肝心なり。三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり。（御書一四四七㊦一六行目）

短い御文でありますけれども、ここにはたいへん重要なことが説かれております。

そもそも、この『秋元御書』は弘安三（一二八〇）年正月二十七日、日蓮大聖人様御年五十九歳の時に、秋元太郎兵衛尉ひょうえのじょうに宛てて認められた御消息であります。

これは秋元殿が、筒御器という竹筒の形をして水とかお酒などを入れる食器を三十個、それとお皿六十枚を、大聖人様に御供養されたことに対してのお礼の返事でありますから、別名を『筒御器抄』とも言います。

この御書を頂いた対告衆の秋元太郎兵衛尉は、下総国しもうきのくに（現在の千葉県）印旛郡白井莊いんぼの人で、文応元（一二六〇）年、大聖人様が松葉ヶ谷やつの法難を避けて、下総の中山に行かれた時に、大田乗明や曾谷教信などと共に入信をしたと言われております。その関係で大田乗明や曾谷教信と親しく、また富木常忍とは親戚であったとも言われております。大聖人様からは、当抄のほかに『秋元殿御返事』などを頂いております。

次に、当抄の大意を申し上げますと、初めに、御供養された器に寄せて秋元殿の信心を称嘆され、器に覆・漏・汗・雑ふくろうぞうの四つの失とががあることについて説かれております。

器の四つの失というのは、一つ目は覆で、覆とは器を伏せてしまうということです。二番目の漏とは、漏れるということです。三番目の汗は、汚れている、汚いという意味であります。四番目の雑は、色々なものが混じっているということです。

このことにつきましては、大聖人様は当抄のなかで、このようにおっしゃっております。

「器に四つの失あり。一には覆と申してうつぶけるなり。又はくつがへす、又は蓋をおほふなり」（御書 一四四七㊦）

つまり、うつ伏せにするということです。

「二には漏と申して水もるなり。三には汗と申してけがれたるなり。水浄けれども糞の入りたる器の水をば用ふる事なし」（同㊦）

これは、水に糞が入ってしまえば、それを用いることができないということです。

「四には雑なり。飯に或は糞、或は石、或は沙、或は土などを雑へぬれば人食らふ事なし」(同註)

御飯のなかに糞や石などが入っていれば、それは食べられません。そして、

「器は我等が身心を表はす。我等が心は器の如し。口も器、耳も器なり。法華経と申すは、仏の智慧の法水を我等が心に入れぬれば、或は打ち返し、或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ、或は口に唱へじと吐き出だしぬ。譬へば器を覆するが如し」(同註)

と、我々の信心の失について、器の四つの失に当てはめて、ここにおっしゃっております。つまり、大聖人様の尊い御法を、聞こうともせず耳をふさいで、やろうともしないという姿は、ちょうど器をうつ伏せるようなものであるとおっしゃっているわけです。また、

「或は少し信ずる様なれども又悪縁に値ひて信心うすくなり、或は打ち捨て、或は信ずる日はあれども捨つる月もあり。是は水の漏るが如し」(同註)

少し信じたようであるけれども、信心がずっと継続していかない。やる時は、ちょっとやるのだけれども、結局、怠けてしまう。こういう姿があるわけであります。要するに、我々が、ある時は信心をまじめにやっても、途中で怠けてしまうというような姿は、ちょうど器から水が漏れるような信心だとおっしゃっているのです。

「或は法華経を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華経、一口は南無阿弥陀仏など申すは、飯に糞を雑へ沙石を入れたるが如し」(同註)

と、お題目を唱えながら謗法を行うのは、御飯のなかに糞を入れたり、あるいは砂を入れたりするようなものであると仰せです。もちろん、そんな信心をしている人はいないと思いますけれども、やはり信心の姿勢として、そういう信心はだめだと、大聖人様は厳しくおっしゃっているのです。

そして次に、呵責謗法の旨を明かされまして、大聖人様の御一代の化導は、正法弘通のために謗法を呵責され、前代未聞の怨嫉・迫害を招くことを説かれて、つぶさに値難の由を述べ、深く謗法を諫めるべきことを示されているのであります。

そして、法華経を修行する者の用心として、今度は、謗人・謗家・謗国の三義を述べて、この三失を脱すべき要術を示し、さらに例を引きまして、この呵責謗法の行者の希有なる旨を明かして、この難信難解の妙法を行じて呵責謗法の難事を果たされていることが述べられているのであります。

ここには、先程は器の四つの失に対し、今度は、人に約し、家に約し、国に約す、という三義についてお述べになっているのであります。

初めの「謗人」とは、正法を謗る人のことを言います。例えば、勝意比丘であるとか、苦岸比丘、インドで小乗経に執して大乘経を謗った無垢論師、大慢婆羅門などが、これに当たるのであります。もちろん、これは古い時代の話であります。現在、日蓮正宗や御本尊に対して誹謗・悪口する者は、まさしく正法を謗る人となるのであります。

第二に「謗家」とは、謗法の家のことです。一生の間、法華経を誹謗せず、昼夜に法

華経を修行している人でも、謗法の家に生まれれば無間地獄むげんに堕ちると言われております。それはなぜかという、与同罪を受けるからです。

では、この与同罪を、どうしたら逃れることができるのかということ、御書のなかでは、「謗家の失を脱れんと思はゞ、父母兄弟等に此の事を語り申せ」(同 一四五二)と説かれております。これはどういうことかと言いますと、家族のなかで御自分一人だけが信心しており、兄弟あるいは親御さんも、みんな謗法であるとします。その時は、家族の方々を折伏しなさいとの仰せなのです。折伏しないで放ほうっておくと、与同罪を受けるとおっしゃっているのですよ。

色々なケースがありますけれども、たいていの場合、初めは謗法だらけのなかから信心を始めるわけです。でも、そのなかで一人ひとりがちゃんと、お父さん、お母さん、兄弟に対して、しっかりと折伏をしていけば、与同罪を受けなくて済むのです。それを、黙して、折伏をしない。そうすると、与同罪を受けると、これは私が言っているのではなく、大聖人様が御書のなかに仰せになっておられるのです。やはり、与同罪は恐るべきですから、もし、おうちのなかで信心していない人がいたならば、しっかりと折伏をしなければいけない。これが謗家の難を逃れることになるのです。

第三の「謗国」とは、当抄のなかに、

「謗法の者其の国に住すれば其の一国皆無間大城になるなり」(同 一四五〇)とおっしゃっております。

つまり、依正不二の原理によって、正報であるところの我々衆生が謗法を犯せば、依報であるところのその国が謗法の国となってしまふ。そうしますと、どういう現象が起きるのでしょうか。

まず初めに、三災が重なるのです。三災というのは、飢饉ききん・疫癘えきれい・兵革ひょうかくであります。要するに、色々な作物が出来なくなったり、疫病がはやったり、戦争が起こったりする。これが三災なのです。国が謗法を犯すと、必ずこういうことになるとおっしゃっているのです。

そして、この三災の次には七難、七つの難が起きるとおっしゃっております。この七難については、薬師経の七難とか、仁王経の七難など、色々と言われてありますけれども、例えば薬師経の七難の一番目には「人衆疾疫難にんしゅうしつえき」があります。病によって多くの人民が病気になったり、死ぬことです。

二番目は「他国侵逼難しんびつ」で、よその国から攻められるという難が必ず起こると説かれております。その原因はすべて謗法にあるとおっしゃっているわけです。だから、大聖人様は「立正安国」ということをおっしゃっておられるのです。正を立ててこそ、国を安んずることができる。この三災七難を逃れるためには、我々が折伏をして、大聖人様の仏法をしっかりと広宣流布していくことが最も大事だということでもあります。

そして三番目が「自界叛逆難ほんぎやく」で、同士討ちです。そういう現象が必ず起こるとあります。

四番目が「星宿變怪難へんげ」です。星宿とは星のことで、彗星や流星が現れたり、星の運行に異変が起きたりすることがありますが、そういう異変が起きるとおっしゃっている

のです。

五番目が「日月薄蝕難」^{にちがつはくしよく}といて、日蝕や月蝕などの天変^{てんべん}、天の変化というものが起きてくる。しかも、その原因が、すべて我々だということです。

依正不二の原理というの、正報というの我々で、国土など、我々を取り巻く環境が依報です。この依報は、我々正報によって変わるのです。我々の信心がしっかりしていれば、先程言った三災も起きないし、この七難も起きない。天変地天^{ちよう}も起きなくなると、『立正安国論』のなかで大聖人様が明確におっしゃっておられるのです。

だから、今日の様々な、日本を含めた世界の色々な悪現象の原因は何かということ、我々はよく知らなければだめなのです。それはすべて、謗法の害毒です。だから、今、我々は立ち上がって、謗法を破折しなければだめなのです。謗法に毒された人達が、たくさんいるわけです。その人達を救っていかねばだめなのであります。

次の六番目が「非時風雨難」です。これは、簡単に言うと季節はずれの暴風雨などの災害です。

七番目は「適時不雨難」^{ちやくじ}で、降らなければならぬ雨が降らなくなるということです。雨というのは、例えば作物が育つ時には雨が必要ですが、もし水が涸れて干上がってしまうと、田んぼがだめになってしまうように、降らなければならぬ時に雨が降らないことを言うわけです。

つまり、こういったことを全部、我々の力の及ばない、ただ単なる自然現象だと考えてしまうのは早計に過ぎます。これはだめです。この天変地天は、正報である衆生、我々自身の生命における、正しいか正しくないかの用^{はたら}きによって変わるのです。

何回も言いますが、正を立てて国を安んずるといふ『立正安国論』の元意は、そこにあるわけです。戦争が起きるとか起きないかは、すべて人間が中心ですから、人間が正しい信仰をしていけば戦争や争いは起きないのです。そしてまた、我々を取り巻く環境も同じであるとおっしゃっているのであります。したがって、この御書のなかに、

「飢渴^{け かつ}発^おこれば其^その国^が餓^き鬼道^{どう}と変じ、疫^{やく}病^{びよう}重^{かさ}なれば其^いの国^く地獄^{じく}道^{どう}となる。軍^{いくさ}起^きこれば其^しの国^く修羅^{しゆら}道^{どう}と変ず。父母^{ふぼ}・兄弟^{けいだい}・姉妹^{あねいもうと}を簡^{えら}ばず、妻^{たの}とし、夫^{たの}と憑^{たの}めば其^この国^く畜生^{じくせい}道^{どう}となる。死^しして三^{さん}悪^{あく}道^{どう}に墮^おつるにはあらず。現^{げん}身^{しん}に其^この国^く四^し悪^{あく}道^{どう}と変^かずるなり。此^こを謗^{ぼう}国^{こく}と申^{まを}す」(同^{どう})

と仰せられております。

お帰りになったら、もう一度、この御書をよく拝読してください。いかに私達が、折伏をしなければならぬかということ、こういったところからも感じ取って、しっかりと折伏に励んでもらいたいと思います。

このようにお述べになったあと、大聖人様がおられました身延での御生活の様子をお述べになられ、最後に結語として、重ねて秋元殿からの御供養に対して心からの感謝を申し述べられております。

以上の如く、この『秋元御書』は、法華経身読の範を示し、法華経行者の用心として呵責謗法、すなわち謗法を破折せよということをお述べになっているのであります。つまり、不幸や争いの根源は、すべて謗法にあるということ、我々はよく知らなければ

なりません。だから、謗法を破折するのであります。

少なくとも、我々、信心をしている者は、謗法の大罪に絶対に堕ちないようにしなければなりません。先程言ったように、例えば、おうちのなかでまだ信心していない人がいたならば、黙っていてはだめです。与同罪を受けるのですから、折伏しなければなりません。

「一文一句なりともかたらせ給ふべし」(同 六六八頁)

と御書にあるように、御自分でできなかつたら、御住職にお願いしたり、あるいは講中の幹部の方をお願いしたりして、一緒に折伏をされればいいのです。もちろん、一遍や二遍の折伏で入信なさる方は、まず、めずらしいと思います。だから根気よく、本当に根気よく折伏をしていくという精神を忘れてはならないということです。

次に、本文に入りますと、「種・熟・脱の法門、法華經の肝心なり。三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」とお示しであります。「種・熟・脱の法門」というのは、仏様の御化導を下種益・熟益・脱益の三益に分けて説かれたものであります。

まず「種」とは下種益のことではありますが、下種益というのは、成仏の因となる妙法蓮華經の種を多くの人達の心田しんでんに植えていくことです。

次の「熟益」というのは、植えられた種子を生長させて、機根を調えることであります。

それから「脱益」というのは、熟成された果実を収穫することであり、つまり得脱とくだつして成仏の境界に至ることを言うのであります。

この種熟脱の三益について、從淺至深して大別いたしますと、迹門の三益と、本門文上の三益と、それから文底の三益に分けることができます。

初めの迹門の三益とは、法華經の化城喩品に説かれる三益のことでありまして、これは三千塵点劫じんてんごうにおける大通智勝だいつう ちしやうぶつの法華經の説法および十六王子による法華覆講ふつこうを下種として、中間・今日ちゆうげん こんにちを熟益とし、未来の得脱をもって脱益とする、という説相であります。

次の本門文上の三益とは、法華經本門寿量品に説かれる三益のことで、まず久遠五百塵点劫を下種とし、次に三千塵点劫の大通智勝だいつう ちしやうぶつから今日こんにち釈尊の爾前四十余年と法華經迹門までを熟益として、本門寿量品に至って得脱することを脱益とする説相であります。

三番目が文底の三益でありまして、これは法華經本門寿量品文底秘沈の下種ほん み う ぜん仏法におきましては、いまだ下種を受けていない本未有善く おんがんじよの衆生が、久遠元初の本法たる本因ほんにんの妙法を下種されることによって熟脱の二益を同時に具そなえ、直ちに得脱することを言うのであります。

釈尊の仏法における種熟脱を文底下種の仏法から見ると、日寛上人が『依義判文抄』に、

「釈尊の御化導は久遠元初に始まり、正像二千年に終わるなり」(六卷抄 一一〇頁)と仰せのように、在世および正法時代、像法時代の衆生の得益は、久遠元初の下種に始まり、釈尊在世の本門を中心とした、滅後正像二千年までの間に、熟益・脱益のすべて

が終了するわけでありませぬ。

したがって、釈尊の熟脱仏法とは縁のない、末法の本末有善の我々衆生は、この熟益、脱益の仏法では利益がありません。末法御出現の下種の御本仏日蓮大聖人様によって、本因妙の仏法である南無妙法蓮華經を下種されて、初めて即身成仏することができるのであります。

この久遠元初の本法たる妙法こそ、ここに「三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」と仰せのように、釈尊をはじめ三世十方の諸仏はすべて、この久遠元初本因妙の妙法五字を修行して、成仏することができたのであります。すなわち、南無妙法蓮華經こそ、一切の仏を生み出した本源の種子であり、一切の仏法の肝要ごうなのです。まさしく今、私達は本法たる妙法を唱えているわけでありませぬから、信心強盛じょうであるならば、成仏は絶対に間違いないのです。

三世十方の諸仏を含め、すべての者は、この本因下種の妙法によって成仏をせられたわけでありませぬから、末代の我々も同じく、この妙法をしっかりと信心修行していけば、必ず成仏は疑いないという、強い確信を持っていただきたいと思ひます。

次にまいります。次が十六番目の『新池御書』であります。

16 新池御書

思し食すべし、法華經をしれる僧を不思議の志にて一度も供養しなば、悪道に行くべからず。何に況んや、十度・二十度、乃至五年・十年・一期生ごしやうの間供養せる功德をば、仏の智慧にても知りがたし。此の經の行者を一度供養する功德は、釈迦仏を直ちに八十億劫が間、無量の宝を尽くして供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は説かせ給ひて候。(御書一四五六ノ一五行目)

この御書は、弘安三(一二八〇)年十二月、日蓮大聖人様が御年五十九歳の時に、身延から新池左衛門尉に与えられた御書であります。

対告衆たいごうしゆの新池左衛門尉とおとうみのくには遠江国磐田郡新池、今の静岡県袋井市の方であります。この方は鎌倉幕府の直参で、日興上人の折伏によって妻の新池尼と共に、大聖人様に帰依したと言われております。そして、大聖人様からは、この御書および『新池殿御消息』を賜っております。

この御書においては、正しい仏道修行あの在り方などについて御教示をされております。初めに、法華經流布の末法に生まれたことを喜び、法華經不信なげの人を嘆かれております。そして、法華經を受持・読誦し、讃めても、經の本意に背けば悪道に墮ちることを述べられ、法華經たもを持つ僧に供養する功德を説かれていませぬからであります。

次に、世間の無常を通して、名聞名利に執着する心を戒め、謗法の者との交わりをいまし与同罪として戒められております。

さらに、仏の三徳を明かして、日本の諸人は仏に背く仏敵とされ、たとえ賤しい身分であっても正法護持の者を尊敬しなければならぬと述べられて、信心が成仏の肝要であり、仏法僧の三宝を尊重すべきであることを勧められております。また、禪宗などの

僧につきまして、彼らが慢心を重ねるのは天魔の所為であると破折されております。

最後に、これらの法門をよくよく理解して、いよいよ信心に励むように諭さとされているのであります。

本文に入ります。

まず「思おぼし食めすべし、法華經をしれる僧を不思議ひとたびの志にて一度も供養しなば、惡道に行くべからず」と仰せです。

この「法華經をしれる僧」とは、法華經の行者のことです。この法華經の行者は、総じて言えば、我々もみんな、法華經を修行するという意味におきましては法華經の行者であります。別して言えば、御本仏宗祖日蓮大聖人様ただお一人を指します。ですから、この「法華經をしれる僧」というのは、すなわち大聖人様のことをおっしゃっているのです。

また、この法華經の行者について、『国府尼御前御書』には、

「釈尊ほどの仏を三業相応して一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも、末代惡世の世に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたり説ととかれて候」(御書 七三九頁)

と仰せられています。さらに同抄には、

「末代の法華經の行者を供養するは、十号具足します如来を供養したてまつるにも其の功德すぎたり。又濁世じよくせに法華經の行者のあらんを留難るなんをなさん人々は頭七分こうべしちぶんに破わるべしと云云」(同頁)

とも仰せであります。

これは、御供養に寄せて、今、末法に在って法華經の行者を供養する功德は、十号を具足せる釈尊を供養する功德よりも勝れているとおっしゃっております。また逆に、法華經の行者に対して留難、つまり様々な形をもって修行を妨げる者は「頭七分にわるべし」と、厳しくおっしゃっているのであります。

このように拝してきますと、ここでおっしゃっている「法華經の行者」とはだれかとなれば、今言った通り、総じては我々も含まれるけれども、別しては宗祖大聖人様のことだということになるわけです。

つまり、この御書では「釈尊ほどの仏を三業相応して一中劫が間」という長い長い間、ねんごろに御供養するよりも、末代の惡世に法華經の行者を供養する功德は勝れているとおっしゃっており、さらにまた、あとの御文でも、十号を具足する仏様を供養し奉るよりも、法華經の行者を供養する功德は勝れているとおっしゃっているのであります。

これは、釈尊を供養する功德よりも法華經の行者を供養する功德が勝れているというのですから、この法華經の行者とは我々のことではなく、御本仏大聖人様のことを指しているのであります。我々はみんな法華經の行者ではあるけれども、それは総じての意味であって、別しては大聖人様、ただお一人なのです。

また今、仏様の「十号」についてありましたけれども、十号というのは、仏様の十種の尊称であります。

その一番目は「如来」であります。如来というのは、一切諸法の根本の真理を体現して、三世にわたる因果律を証得した方を言うのです。元は「かくの如く立派な行いをし

た人」つまり、修行を完成して悟りを開いた人という意味であったようではありますが、のちになりまして、「人々を救うために、かくの如く来たりし者」すなわち、真理の世界から迷界に、衆生救済のために来られた方、という意味にもなったようであります。

二番目は「^{おうぐ}応供」であります。応供というのは応受供養と言いまして、つまり人天の御供養を受けるに値する者という意味です。

三番目が「^{しょうへんち}正遍知」で、これは一切の智を具え、^{あまね}諸法を遍く正しく理解する人ということであります。

四番目の「^{みょうぎょうそく}明行足」というのは、過去・現在・未来の三世に通達して、善行を修して満足する人。

五番目の「^{ぜんぜい}善逝」というのは、善く逝くという意味でありまして、無量の智慧をもって迷いの世界をよく超え出て、悟りの彼岸に至って、再び迷いの^{しょうじかい}生死海に堕ちない人。

六番目の「^{せけんげ}世間解」というのは、因果の理法を悟り、世間・出世間のことをよく理解する者。

七番目の「^{むじょうし}無上士」というのは、衆生のなかで、この上なく優れている者。

八番目の「^{じょうごじょうぶ}調御丈夫」というのは、一切衆生を調伏・制御して成仏させる力を具えている者。

九番目の「^{てんにんし}天人師」というのは、天と人の師匠で、あらゆる者を指導し、師となる人のことを言います。

そして最後の十番目が「^{ぶつせそん}仏世尊」で、そのうちの仏とは、智や徳が円満である方、世尊とは世のあらゆる人々から尊敬される福德の人のことを言うわけであります。

これが、仏の十号であります。

このような十号のまします仏様よりも、法華經の行者が勝れていると言え、その法華經の行者とは御本仏以外にはない、ということになるのであります。

ですから、私達は^{おん}大聖人様を末法の法華經の行者と仰ぎ奉り、一度でも供養する者があれば悪道に堕ちることはないとおっしゃっているわけでありまして、しっかりと信心に励むべきであります。

次に「^{いかい}何に況んや、^{じゅうど}十度・^{にじゅうど}二十度、乃至五年・十年・一期生の間供養せる^{こうとく}功德をば、^{おん}仏の智慧にても知りがたし」と仰せです。

先に、法華經の行者を一度でも供養する者は悪道に堕することはないと、その功德の大なることを仰せられましたが、さらに続いて、まして十度、二十度、乃至、五年、十年、一生の間、ずっと供養する功德は、仏の智慧をもってしても計り知れないほど大きいと仰せられているのであります。つまり、仏様を供養する、御本仏大聖人様を御供養する功德は、まことにもって勝れているということをおっしゃっているわけでありまして。

そして「**此の經の行者を一度供養する功德は、^{ただ}釈迦仏を直ちに八十億劫が間、無量の宝を^{すく}尽くして供養せる功德に百千万億勝れたりと仏は説かせ給ひて候**」と、これは今まで申し上げてきた通り、末法の法華經の行者たる御本仏大聖人様を、一度でも供養した者は悪道に堕ちないと仰せられているけれども、その功德はそればかりではなく、^{ただ}釈尊を直ちに八十億劫の間、無量の宝をもって供養する功德に百千万億も勝れていると、仰

せられているのであります。

これは、法華經の法師品に、

「人有^{ひとあ}て^て仏道を求めて 一劫の中に於て 合掌し我が前に在^ありて 無数の偈^げを以て
讚^ほめん 是^この讚^{さんぶつ}仏に由^よるが故に 無量の功德^えを得^えん 持^{たん}經者^みを歎^そ美^{また}せんは 其^その福復^{また}
彼^しに過^しぎん 八十億劫^{しきしやうおよびこう}に於て 最妙^みの色^{そく} 声^し 及^あと 与^ある香味^{しきしやう} 触^{そく}を以て 持^{たん}經者^みに供養^{きやう}せよ」

(法華經 三二四^ぎ)

という御文があります。すなわち「持經者」というのは法華經を受持する者、すなわち法華經の行者を指しまして、その法華經の行者を供養する者の功德が、いかに大きいかを示されているのです。

何回も言いますが、ここでおっしゃっている法華經の行者とは、別しては大聖人様のことです。したがって、『聖人知三世事』には、

「日蓮^{これ}は是^こ法華經の行者^{ふきやう}なり。不^あ輕^{しやうけい}の跡^{あと}を紹^{きやう}繼^きするの故^{こう}に。輕^{きやう}毀^きする人^{こう}は頭^{こう}七分^べ
に破^われ、信^あずる者^{あんみやう}は福^つを安^あ明^{めい}に積^つまん」(御書 七四八^ぎ)

と仰せられているのであります。すなわち「信ずる者は福を安明に積まん」というのは、安明とは須弥山のこと、大聖人様を信ずる者は須弥山の如く、計り知れないほど大きな功德を頂くことができるとおっしゃっているわけです。

本宗の信心は、大聖人様を御本仏と仰ぎ奉るのです。この御本仏と仰ぎ奉る「讚^{さんぶつ}仏」、
仏様^{さんたん}を讚歎する心を、いつまでも忘れずにいるかぎり、私達は御本尊から大きな功德を
頂くことができるということでもあります。このことを、どんな時にも、特に苦しい時にはしっかりと
思い出して、お題目を唱えていくことが肝要であります。

次に、十七番目です。

17 新池御書

仏^なに成^なり候^{よう}事は別の様^{よう}は候^{よう}はず、南無妙法蓮華經^{なむめいほうれんげお}と他事^{たじ}なく唱^なへ申^しして候^{よう}へば、天
然^{てんぜん}と三十二相八十種好^{そな}を備^{そな}ふるなり。如^に我^に等^が無^に異^{むい}と申^しして釈尊^{しやくそん}程^{じやう}の仏^{ぶつ}にやすやすと
成^なり候^{よう}なり。譬^{たと}へば鳥^{たまご}の卵^{たまご}は始^はめは水^{みづ}なり、其^その水^{みづ}の中^{なか}より誰^{たれ}かなすともなけれ
ども、鶯^{くちばし}よ目^めよと巖^{いわ}り出^いで来^きて虚^{こくう}空^{くう}にかけ^かけるが如^{ごと}し。我^わ等^みも無^む明^{みやう}の卵^{たまご}にしてあ
さましき身^みなれども、南無妙法蓮華經^{なむめいほうれんげお}の唱^なへの母^{はは}にあた^ありめられまいらせて、三十二相^{さんじふにさう}の鶯^{くちばし}出^いでて八十種好^{そな}の鎧^{よろい}毛^げ生^おひそろひて実相^{じつさう}真如^{しんじゆ}の虚^{こくう}空^{くう}にかけ^かけるべし。(御
書一四六〇^ぎ一^ぎ二行目)

初めに「仏^なに成^なり候^{よう}事は別の様^{よう}は候^{よう}はず、南無妙法蓮華經^{なむめいほうれんげお}と他事^{たじ}なく唱^なへ申^しして候^{よう}へ
ば、天然^{てんぜん}と三十二相八十種好^{そな}を備^{そな}ふるなり。如^に我^に等^が無^に異^{むい}と申^しして釈尊^{しやくそん}程^{じやう}の仏^{ぶつ}にやすやす
と成^なり候^{よう}なり」とおっしゃっております。この御文の前を拝しますと、

「此の經の信心と申すは、少しも私なく經文の如くに人の言を用ひず、法華一部に背
く事無ければ仏に成り候ぞ」(御書 一四六〇^ぎ)

とおっしゃっているのです。つまり、信心とは、少しも私心・我見なく、經文に、

「^{えほうふ えにん}依法不依人（法に依って人に依らざれ）」（同 一五六^{にん}等）

と仰せの如く、ただ仏様の教えを信じて、人師・論師の言葉を用いず、御金言のままに信心に励み、法華経の教えに背くことがなければ、必ず成仏すると仰せになっているのであります。

これはたいへん大切なことでありまして、御本仏大聖人様の御金言をしっかりと拝し奉っていくということが最も根本だと、おっしゃっているわけでありまして。

したがって、南無妙法蓮華経と、全く他事に執られることなく一心に唱えていけば、自然に三十二相・八十種好を具え、また、

「^{ことな}如我等無異（我が如く等しくして異なること無けん）」（法華経 一一一^{ことな}）とて、釈尊ほどの仏に簡単に成れるとおっしゃっているわけでありまして。

「三十二相」というのは、仏様が具えている三十二の優れた姿・形のことでありまして、このなかには^{こんじき}金色相とか、あるいは^{みけんびやくごう}眉間白毫相などという相があります。また「八十種好」というのは、仏様あるいは菩薩の身に具わる八十種の好ましい相のことで、身体につやがあるとか、声に響きがあって奥深いとか、身体はいつも清潔であるなど、色々なことがあります。三十二相は^{てんりんじょうおう}転輪聖王、^{たいしやく}帝釈天王、^{だいぼん}大梵天王にもあるが、この八十種好は、ただ仏様と菩薩のみが有するものであります。

ただし、この三十二相・八十種好を具えると言いましても、下種仏法における成仏相は三十二相・八十種好の、^{しきそうしやうごん}いわゆる色相莊嚴の仏に成るのではなくして、我々の信心は即身成仏を本懐とするわけでありまして。ですから、我々も三十二相・八十種好という色相莊嚴の仏に成る、あるいはその姿を^{まね}真似るのではなくして、その身そのままに成仏する、即身に成仏するということなのであります。

つまり、即身成仏とは凡夫がその身のままで仏に成ることを言うわけです。すなわち、法華経以前の諸経では、例えば悪人は善人に変じて、あるいは女子は男子に生まれ変わって、そしてさらに^{りやっこう}歴劫修行という長期の修行によって、三十二相・八十種好を具えた仏に成ると説かれていたのであります。しかし法華経では、この歴劫修行によらずとも、妙法の功德によって、凡夫の身そのままの姿で成仏すると説かれたわけでありまして。

例えば、法華経の提婆達多品第十二では、八歳の竜女の即身成仏が説かれております。つまり、竜女ですから^{だしん}蛇身であります。蛇身の竜女が、その身そのままに成仏をしたことが説かれています。

したがって、南無妙法蓮華経と一心に唱え奉れば、まさに、法華経方便品に「如我等無異」とあるように、必ず即身成仏ができるとおっしゃっているのであります。これが、爾前迹門の仏法との大きな違いであります。

次に「^{たまご}譬へば鳥の卵は始めは水なり、^そ其の水の中より誰かなすともなけれども、^{くちばし}鶯よ目よと^{かさ}葢り出でて来て^い虚空に^{こくう}かけるが如し。我等も無明の卵にしてあさましき身なれども、南無妙法蓮華経の唱への母にあたゝめられまいらせて、三十二相の鶯出でて八十種好の^{よろいげ}鎧毛生ひそろひて^お実相真如の虚空に^{こくう}かけるべし」と仰せであります。この御文は、我ら衆生が妙法の功德によって成仏できる様を、卵から鳥になっていく譬えをもって示されているのであります。

例えば、鳥の卵は、初めは水のようなものであるが、親鳥の温める力によって自然に、いつとはなく身体が出来てきて、ついには虚空を飛ぶようになる。妙法の功德も、このようなものだと、譬えをもって示されているのであります。

それでは、次にまいります。

18 新池御書

有解無信とて法門をば解りて信心なき者は更に成仏すべからず。有信無解とて解はなくとも信心あるものは成仏すべし。(御書一四六一頁一行目)

「有解無信とて法門をば解りて信心なき者は更に成仏すべからず。有信無解とて解はなくとも信心あるものは成仏すべし」とありますが、初めの「有解無信」というのは、御法門の理解はあるけれども信心がないこと、それに対して「有信無解」というのは、信心はあるけれども御法門の理解がないことです。つまり、当文は有解無信と有信無解を比較して、有信無解の者こそ成仏すると仰せられているのであります。

さらに、この御文のあとに、

「皆此の経の意なり、私の言にはあらず。されば二の巻には『信を以て入ることを得、己が智分に非ず』とて、智慧第一の舍利弗も但此の経を受け持ち信心強盛にして仏になれり。己が智慧にて仏にならずと説き給へり。舍利弗だにも智慧にては仏にならず。況んや我等衆生少分の法門を心得たりとも、信心なくば仏にならんことおぼつかなし」(御書 一四六一頁)

とおっしゃっているのであります。

すなわち、法華経譬喩品第三には、

「汝舍利弗 尚此の経に於ては 信を以て入ることを得たり 況んや余の声聞をや 其の余の声聞も 仏語を信ずるが故に 此の経に随順す 己が智分に非ず」(法華経 一七四頁)

と説かれて「以信得入」ということをお示しであり、このことを言っているわけです。つまり、智慧第一と言われた舍利弗でさえ、己れの智慧によって成仏したのではない。法華経を受持し、その信心をもって成仏することができたのだ、と言われているのであります。

まさしく、この言は仏教の原点とも言うべきもので、信心をおろそかにしたのでは成仏は絶対におぼつかないということを明言されているのであります。

このほか、成仏得道のためには、信心が最も肝要であることについて、例えば『法華題目抄』には、

「夫仏道に入る根本は信をもて本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たとひさとりにあらずとも、信心あらん者は鈍根も正見の者なり。たとひさとりにあらずとも、信心なき者は誹謗闡提の者なり」(御書 三五三頁)

と説かれております。まさに、先程の御文とこの御文を合わせて拝していけば、いかに

信ずるということが大事であるかが解ると思います。

そもそも宗教から、仏教から、信ずるということを取ってしまえば、それはもう既に、宗教でもなければ、仏教でもなく、ただ単なる理論に過ぎません。ただ単なる理論では、絶対に成仏をしない、ということでもあります。そんな理論では、自分も救えないし、他の人をも救うことができないのです。

ですから、仏教というのは、信心がすべての根本なのです。そこに、大聖人様は、今、有解無信と有信無解の二つを示されて、どちらを採るべきか。やはり、私達は信心を採るべきであるということなのです。

幼稚園児の子供が御法門のことは解らなくとも、お父さん、お母さんと一緒に勤行をし、無心にお題目を唱えていく。健気に信心に励み、一生懸命に勤行をする。そこに本当の信心の姿があるのです。だから、なまじ、いい加減な知恵で法門をわずかに知って、偉そうに言うのはだめなのです。

こういう姿は、現にたくさんあります。日蓮正宗から離れていった創価学会がそうです。あるいは大謗法を犯した正信会の連中もそうです。みんな、宗門から離れていった連中は、信心がないのです。信心がないから、おかしくなってしまうのです。何を根本とすべきか。本宗においては、まさしく本門戒壇の大御本尊を根本尊崇そんすうとしていくところに、一番大事なものが存しているわけですから、これを忘れてしまって、偉そうなことを言ってもだめだということになるわけでもあります。

例えば、この御文のなかに「五十二位」が説かれています。五十二位の初めに「十信」が説かれています。この十信の一番初めには何が説かれているのかと言いますと、「信心」が説かれています。

「五十二位」とは、十信・十住・十行・十回向・十地の五十位と、等覚・妙覚の二つを加えて五十二位と言うわけです。これは大乘の菩薩の修行の階位を五十二に分けたものでありますけれども、その一番最初の十信のなかの、そのまた一番最初は信心なのです。

ですから、五十二位の段階の、一番のスタート、起点は信心だということで、仏教にとって、いかに信心が大切であるかということ、ここでおっしゃっているのであります。

いかに信心が大切であるかということ『一念三千法門』には、

「凡そ此の経は悪人・女人・二乗・闍提を簡ばず。故に皆成仏道とも云ひ、又平等大慧とも云ふ。善悪不二・邪正一如と聞く処にやがて内証成仏す。故に即身成仏と申し、一生に証得するが故に一生妙覚と云ふ。義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給ふ」(同 一一〇頁)

と仰せであります。

つまり、悪人であろうが、女人であろうが、一闍提人であっても、南無妙法蓮華経の意味がどういうことであるかを知らなくても、ただ一心に南無妙法蓮華経と唱えていけば、必ず成仏をするということです。

また『三世諸仏総勘文教相廢立』には、

「名字即みょうじそくの位にて即身成仏えんどん きょう じいする故に円頓の教には次位の次第無し」（同 一四一七ぎ）

と仰せられております。「名字即」というのは、皆さん方も御存じのように、六即の二番目で、初めて正法の名を聞くということです。

この六即というのは天台大師が立てた御法門でありまして、我々凡夫が悟りに至るまでには、理即・名字即かんぎょう・観行即そうじ・相似即ぶんしん・分真即くきょう・究竟即という六つの段階を経ていくというのであります。

「円頓の教」すなわち、円満かたよにして偏らず、一切衆生を速やかに成仏させるところの教えである法華経、つまり今時末法の三大秘法の仏法においては、南無妙法蓮華経の名字を聞いて有り難いと感じる、この信心を起すことが出発点でありまして、この名字即の位から即身成仏することができるとおっしゃっているのであります。

六即の最初は「理即」と言いまして、みんなに仏性があるということです。しかし、その仏性があるというだけでは、成仏はしないのです。妙法蓮華経の名字を聞く名字即の位に入って初めて、即身成仏するのです。

だから、どんな人でも、みんな平等に、理即で説かれるように仏性はあるのです。理屈においてはみんな仏性を持っているけれども、その仏性が仏性としての用はたらきをしないかぎり、その人は救われないのです。

つまり、妙法蓮華経の名字を聞くことが大事なのであり、下種をするということが、いかに大事かということです。相手が耳をふさごうが、怒ろうが、何をしようが、妙法蓮華経の名字をまず下種する、この御本尊のすばらしさを説いていくことが大事なのです。

もちろん、色々な形がありますが、どこかの駅前に立って、ガンガン、スピーカーで怒鳴ってあれば、それで下種したと思うのは、少し違うでしょう。しかし、謗法の者達にも、理の上ではみんな仏性があるわけだから、あとは私達が下種をすることが一番大切だと、私達はよく知らなければなりません。

今日、色々な形で折伏が行われております。私がつくづく思うのは、色々なやり方が、支部などによってあると思えますけれども、どんな方法でもいいから、まず試してごらん下さい。例えば、門前折伏とか、あるいは街頭折伏とか、あるいは訪問折伏とか、色々なことをやっていますよね。まずは、色々な形をやってみてください。そのなかから何がいいか、どういう方法が一番いいか、だんだん判ってきますよ。なにしろ、多くの人達にしっかりと下種することが一番大事であります。そこから、また色々な折伏の形が生まれてくると思えます。

『御義口伝』には、

「此の本法を受持するは信の一字なり。元品がんぽんの無明を対治する利剣は信の一字なり。無疑むぎ曰信の釈むぎわつしん之これを思ふべし」（同 一七六四ぎ）

と仰せであります。

先程も申し上げましたけれども、譬喩品には「汝なんじ舍利弗なお尚此の経に於ては 信を以て入ることを得たり」と説かれております。つまり「信」ということが極めて大事で

ありまして、この信ずるといふことの根本は、まず下種なのです。大聖人様の仏法、妙法蓮華經の名字を教えることなのです。教えなければ、信じません。

ですから、折伏というのは、どんな形にしても、この大聖人様の仏法が一番すばらしい、この大聖人様の仏法によって必ず救われる、不幸が幸せに転じていく、苦しみが楽に転じていく、^{てんめいかいご}転迷開悟していくということをやまず説くこと、すなわち下種することなのです。このことを、折伏のまず一番最初に心得ていかなければならないと思います。

まさに今日の混沌とした世界を救うためには、我々の折伏以外にありません。このことを、特に本日ここに集まった青年部の方々は、しっかりと心肝に染めてもらいたいと思います。

なお、申し上げますと、来年の三月八日には、いよいよ日興上人御生誕七百七十年の佳節をお迎えいたします。

来年の三月八日まで、あと二百三十日です。今日、来ている人達が、この残り二百三十日を、真剣に折伏してごらんください。誓願は、必ず達成できます。二百三十日もあるのです。

本当にその自覚を持って、折伏の仕方は色々あるでしょうが、一人ひとりが立ち上がってごらんください。まず、あなた方が変わります。仏様の子として、仏子の用きをしていくなかに、必ずあなた方が変わる。青年部のあなた方が変われば、講中が変わります。法華講が変わります。講中が変われば、まず地域が変わるでしょう。それが拡大していけば、必ず、日本が変わります。

誓願達成まであと二百三十日もあるのです。今日、お帰りになったら、全員が御本尊様にお誓いして、立ち上がってください。

そしてまた、あなた方が立ち上がるると同時に、同志を作っていくください。お一人で折伏に行くのではなくして、だれか一人を連れて、御一緒して行きなさい。その人がまた広布の戦士になって、また次の人を連れて折伏に行く。そしてまた、次の人が同じように同志を連れて折伏に行く。そういう輪が広がって行ってごらんください。誓願は必ず達成できます。

題目をしっかりと唱えて、あらゆる魔を打ち払って、是非、立ち上がって、必ずすべての支部が誓願を達成していただきたいと思います。

そして、来年の三月、皆さん方がお山に来る時は、本当に胸を張って、御戒壇様にお目通りできるようにしましょう。下を向いて御挨拶をするのではなくて、堂々と胸を張って、大聖人様の御前において、御本尊様の御前において、「我れ、かく戦えり」「広宣流布の戦いを見事、完遂しました」と、^{ほま}誉れある御報告をしていただきたい。その原動力になるのは、若い力を待った、あなた方なのです。

是非、今日からさらに心を新たにして、広布のための戦いをしていていただきたいことを心からお祈りいたしまして、本日の講義を終了いたします。